

共同研究に寄せて

所 管：情報科学研究所

研究期間：平成25年度

研究テーマ：地域活性化と情報活用

研究代表者：根本 忠明（本学教授）

研究分担者：服部 伊人（本学教授）、刑部 芳則（本学准教授）、
羽根 秀也（本学非常勤講師）、木村 昌史（本学非常勤講師）

研究の目的・概要

わが国は長引く経済不況と人口減少により、日本各地の地域経済は低迷し、地域崩壊ともいえる酷い状況に追い込まれる所も出てきている。また、2011年の東北大震災による地域復興のように、ゼロから出発しての地域活性化も重要になってきている。

このために、わが国にとって全国の自治体の活性化は、重要な政策課題になってきている。このため、国内の日本人によるものだけでなく、海外からの訪日外国人も含めた地域活性化が模索されてきている。たとえば、外国人観光客を2030年までに3000万人招こうとしている。

本研究プロジェクトは、このような地域活性化の試みに、自治体・組織体・住民・短期滞在者との間でのコミュニケーションの方策と情報技術の利用が、どのように貢献できるかについて、多角的に調査・分析しようとしたものである。

このような研究アプローチをめざすために、異なる専門分野の研究者を集めての共同研究とした。歴史学、観光社会学、マルチメディア、通信ネットワーク、ソーシャル・ネットワークなどの異なる専門分野の研究者を集め、自治体関係者や地元経営者や地元住民などの参加も得て、共同研究をすすめてきた。実際には、異分野の研究者間のコミュニケーションは必ずしも容易ではなかったが、2年間という期間が意思疎通の改善に役立っている。

本研究では、日本国内の地域の活性化についてグローバルな観点も視野にいれている。訪日外国人がネットワークを利用して、日本各地の魅力を世界に発信している内容や、国内各地のスキー場やサイクリングロードの地域おこしに、世界から訪日外国人が集まり貢献してきている事例の紹介など、毎月の検討会で議論してきた。

この地域活性化の具体的なツールとして、ICT（情報通信技術）に注目している。ICTをニューメディアとして捉えている。現在のラジオやレコードといったオールドメディア（マスメディア）でも、1920年代に登場してきた当時は、社会に大きな影響を及ぼした画期的なニューメディアである。

具体的には、戦前から戦後、現在までの地域活性化の歴史や概観について情報交換をすると共に、過去の成功例と課題について検討している。このような試みは、新しい状況における新しい技術の採用という観点からみると、共通する要素が多々あり研究者の間で学ぶことは多かったとあってよい。

最新の情報技術としては、ツイッターを始めとするSNSやクラウドコンピューティング等のコミュニケーション技術、拡張現実・デジタル・サイネージ・プロジェクション・マッピング等のマルチメディア技術、スマートフォン・タブレット・携帯パソコンなどの情報機器といったものに注目し、それらの活用が地域活性化につながる情報活用事例について研究してきた。

そして、自治体・組織体（企業・商店・大学ほか）・地元住民・短期滞在者（学生・観光客・帰省客など）による町おこしや地域活性化に、上述の情報ツールを利用したコミュニケーションの構築が、どのように役立つかについての調査・分析を目指している。

このなかで、従来の情報活用（口コミ、電話、新聞など）と新しい情報技術活用との違いについて留意することとする。たとえば、これまでのTV大河ドラマによるロケ地巡りと、最近のアニメ巡礼による萌えおこしの違いと経済効果への影響内容など。これからの地域活性化に、新しいツールがどのように貢献しえるかについて知見を得ようとしている。

研究成果

以上は、2年間の研究会での研究発表および学会報告による研究状況をまとめたものであるが、実際の研究調査（2年目）は、3つのグループに分かれて作業を行ってきた。それぞれ異なる時代における地域活性化とその時代の最新の情報機器の活用をテーマにして、研究を行ってきた。そのまとめが、次の3つの研究報告書である。

1つは、戦前の地域おこしと情報機器の活用である。1930年代から流行した新しい民謡による地域おこしに関する文献研究である。この研究では、当時のニューメディアであるラジオ、映画、レコードといった情報機器を組み合わせた広報が、新民謡の普及定着にどのように影響をしたかを分析している。

刑部の研究「東京音頭の創出と影響—音頭のメディア効果」は、レコード発売された東京音頭が夏の盆踊りの定番になり、当時の地域おこしに大きな効果を発揮したことを明らかにする。この東京音頭は、日本に古くからある民謡とは異なり、1920年代に登場し普及した新民謡と呼ばれる新ジャンルに属する音楽である。この新民謡の研究は未開拓であり、ほとんど研究がなされてこなかった。

この研究は、この新民謡の代表といえる「東京音頭」を取り上げ、これまで不明であったいつどのような経緯で作成されたのかについて明らかにするとともに、東京音頭が普及し、盆踊りとして定着し、地域の一体化に貢献するようになった経緯についても明らかにしている。この東京音頭は、レコード、映画、新聞といった当時のニューメディア（現在のマスメディア）を、レコード業界ほかの各メディア産業がかかわって、複合的に活用し普及させるという画期的なアプローチが採用され普及につながったことを立証している。

2つは、2011年の東北大震災による地域復興を契機に始まった、災害時を想定した災害に強い街づくりと地域コミュニケーションのための情報活用である。先の研究とは異なり、将来の災害対策のためのシステム構築の在り方を検討している。住民の持つスマートフォンと自治体のパソコンやタブレットとを結びつけたネットワーク化について、フィールド調査とネットワーク実験を行っている。

木村・羽根の共同研究「クラウド型防災システムの開発と運用」では、2011年当時の各

種ソーシャルメディアの普及・活用レベルが、災害対策に影響した状況と問題点について調査分析している。これを踏まえて、これからの地域の防災システムとして、クラウドとソーシャルメディアを組み合わせたネットワーク・システムを提案している。

このフィールド実験は、埼玉県春日部市のこれまでの防災システムを、地域クラウド・サービスを利用し、地元住民のスマートフォンとの間で、災害時におけるリアルタイムな情報交換を容易にするためのシステム構築を目指したものである。

このネットワーク・システムでは、大災害時において市民だけでなく地域外からの避難民もコミュニケーションを図り、ネットワークが運用停止やアクセス困難に追い込まれないことに重点を置いている。そのための具体的な技術的方策を取り込んでいる。

3つは、海外からのインバウンドによるわが国の観光に焦点を当てたものである。これまでの日本人による国内観光との違いに注目し、海外からの外国人観光客による日本の観光の在り方を研究テーマとしたものである。

根本・服部の共同研究「地方創生と外国人観光客の旅行情報」は、外国人観光客の拡大と彼らの旅行情報の利用が、全国各地の観光地の活性化にどのように影響しているかをウェブサイトを中心に調査したものである。

世界的な旅行口コミサイトや観光ガイドの情報が、外国人観光客の観光に大きな影響を及ぼしている。この結果、注目を集める外国人観光客の人気スポットとして、日本人にとって意外な場所が増えている。外国人観光客の拡大を、全国各地の地方創生に結び付けるには、彼らが利用するSNSや旅行口コミサイトにどう対応していけばよいかを検討している。

